

短編0002



「
柵
越
し
の
光
」

大阪府立堺東高等学校

湯澤 苺香

表紙

「篠原さんは、今まで、頑張ってこられたんですね」

そう言って、白石さんは静かなまなざしをこちらに注いだ。労る、というより、なだめるような視線だった。私は曖昧に笑ってみせた。頑張った、だなんて。それは誰にとつての評価なのだろう。何を頑張ったのか、自分でもよく分からない。ただ、その問いを掘り返すことも、否定することすらも、今の私には重たすぎた。

「まあ、そうですね」

初めての精神科の受診は、一方的な励ましで終わった。

高校。世間が「青春」と美化するこの空間が、私には息の詰まる檻にしか思えなかった。誰もが楽しく過ごせる場所ではない――少なくとも、私のような社会不適合者にとつては。朝起きて制服に袖を通し、バスに揺られて通うその日常は、少しづつ、確実に、心を削っていく。教室の喧騒は頭の中にノイズのように響き、視線は鋭く、笑い声は刃のようだ。友達を作ったり、部活に入ったりしていれば、少しは違ったのかもしれない。しかしそうすれば、傷つく確率も上がる。それは中学時代に、嫌というほど思い知らされた。だから私は、安全な道を選んだ。何も踏み込まず、ただ目立たずやり過ごすことを。それでもなお、他人の目は気になって仕方なかった。一人で昼食をとること自体は、慣れていた。けれど、その姿を見た誰かが何を思うか、それを想像するだけで喉が詰まった。次第に、食事すら落ち着いてできなくなり、私はトイレの個室で咀嚼することを覚えた。

授業だけが、唯一の救いだった。少なくとも、個人で受けるものだから。だが、グループワークという言葉が黒板に現れると、私の脈拍は急に早くなった。誰と組むか、何を話すか、どんな顔をすればいいのか。そのすべてが試練だ。気の合う者同士で盛り上がるグループの中に入ると、私は空気にいるしかなかった。中身の無い雑談が飛び交い、甲高い笑い声が響く。そのたびに、耳を塞ぎたくなる衝動に駆られた。

「授業の話をしよう」

そう言えたなら、どれだけ楽だろう。だが、そんな度胸の度という文字すら、私の心にはなかった。そもそも、名前も知らないあの子たちに、私はどう見られているのかを気にしている時点で、もう敗北だった。私なんて、そもそも見られるに値する存在ですらないのに。

その日も、私は学校を休んだ。頭に鈍い痛みが沈んでいて、体を起こすだけで世界が軋んだ。何もしていないはずなのに、疲れていた。眠っても、夢の中にすら安らぎは訪れない。何かに責められているような気がして、浅い眠りを繰り返す。

「ストレス性の頭痛、でしょうかね」

白石さんは、診察室の端にある観葉植物を見ながら、曖昧に言った。「病名」ではなく「気

配」のような言葉だった。それが余計に、不確かで、私を不安にさせた。もしこれが骨折だったら、説明する必要もなかった。ギプスを見せれば、誰もが納得する。だが、心の痛みには包帯もなければ、診断書の文字すら薄ぼんやりしている。だから私は、いつまでも「さぼり」だと、教師や同級生に思われている。そう考えると寝つけず、起き上がり、処方された茶色の粉末を飲んで嘔吐く。でも、頭は痛むのを止めてくれない。再びベッドに倒れこみ、ふと薬袋に目をやる。「漢方薬」――母が勝手に選んだ、その粉の名称だった。「副作用がない漢方がいいです」と言って。副作用があったとしても、よく効く薬の方がいい、と言いかけた私の言葉は、途中で封じられた。母と私とは、似ても似つかない。彼女は太陽のような人で、眩しさに満ちていた。明るくて、前向きで、楽天的で、そして、なにより自分が大好きな人だった。私はその逆。暗くて、臆病で、世界が嫌いで、自分の存在すら時々信じられなかった。母は決して悪人ではない。むしろ、善意だけでできているのかと思うほど、まっすぐな人だ。ただ、その善意は、時に私にとっては暴力だった。

「風ちゃん、薬に頼らなくても大丈夫よ。きつとそのうち、頭痛なんて消えるから」
その「きつと」の中に、私はどれだけの不安を閉じ込めてきただろう。

最近では、休み時間をひとりで過ごすことさえ、苦行に近いものとなっていた。正確には、その姿を「誰かに見られる」という行為のほうが、私を息苦しくさせるのだ。孤独そのものより、孤独にあるということ了他者の視線によって証明されるのが、何よりも痛かった。だから、私は逃げ場所を図書室に求めるようになった。静寂が支配するその空間は、学校の中にありながら、外界とは切り離された小さな浮島のようなだった。ページをめくる音と、かな紙の匂い。窓際の古い木の机。天井近くの蛍光灯が、頼りない光で本の文字を照らしていた。司書さん以外に人の気配はなく、私の思考もそこでは、ようやく風通しを得る。

ほとんどの休み時間を図書室で消費していたある日。

「ねえ、それ、星新一だね」

聴こえるはずのない声が、すぐ隣からした。私は反射的に肩を震わせ、思わず小さな声を漏らしてしまった。おそろおそろ顔を上げると、そこにはひとりの男子生徒が立っていた。硯のように深く艶のある黒髪。そして、それと正反対の、雪のように白い肌。見覚えがあった。彼の輪郭は、夢の中に出てくる人物のようにどこか曖昧で、掴みどころがなかった。

「あ、ごめん。篠原さんだね、急に話しかけちゃって」

「いや、あの、大丈夫です」

異性とまともに言葉を交わすなんて、小学校以来かもしれない。脳内が、彼の肌のように真っ白になった。沈黙が怖くて、何か言わなければと思った。

「ええと、たしか、あなたは……」

「同じクラスの、柊木蒼真だよ」

ああ、そうだった。名前と顔を一致させるのが苦手な私でも、彼の顔だけは、なぜかはつきりと記憶に焼きついていた。中性的で、どこか人間離れた均整をもった顔立ち。目に光を宿しながらも、その奥が深く澱んでいるようにも見える。

「それで、好きなもの？ 星新一」

「まあ。……でも、なんというか、星新一って子どもっぽい印象ありません？ 短編集だし、文字数も少ないし、文学って感じがしないというか」

それは、私の本音ではなかった。ただ、無意識に「笑われない自分」を選ぼうとしたのだ。いつから私は、自分の好きなものを言うことさえ、臆してしまうようになったのだろう。

「そうかもしれないけど、僕は好きだよ、星新一」

彼の口元が、かすかに弧を描く。その表情が、ずっと動かなかった感情の表面を、そつとなぞるように触れた。

「一話一話が短いのに、笑えたり、ぞつとしたり、考えさせられたり……人の心をあんなに揺さぶれるって、すごいことだと思わない？」

彼はそう言いながら、照れたように額に手をやった。

「いや、すごい、なんて言葉じゃ伝わりきらないな。もっと僕に、語彙力があればなあ」

その様子がどこか可笑しくて、私の口から自然と言葉がこぼれた。

「わかります。……読むと、現実の匂いがほんのり残ったまま、空想の世界へ連れて行ってくれるような、そんな感じがして」

柊木くんの瞳が丸くなったあと、ふっと緩んだ。三日月が雲間から顔を出すような、柔らかな光を帯びていた。

「やっぱり、好きなんだね」

その言葉が嬉しくて、私は、今この一瞬だけは、高校を「悪くない場所」だと認めてもいいかもしれない——そう思った。

次の授業は、歴史総合。返却されるテストの束が教師の手に抱えられた瞬間、教室には静かな緊張が走った。私には、騒ぐ友達も、放課後に遊ぶ相手もない。だから、帰宅後にすべきことは決まっている。勉強。勉強だけが、私を裏切らない唯一の存在だった。やればやるだけ、点数というかたちで応えてくれる。理不尽な解釈も、意味のない雑談も、そこには存在しない。そんな世界が、私は好きだった。教師が私の名前を呼ぶ。名指されたその一瞬だけで、手応えは確信に変わる。答案用紙を受け取り、席に戻る。椅子に沈んだ途端、緊張が小さくほどけ、深い呼吸がひとつ漏れた。だが次の瞬間、耳をつんざくような悲鳴が私の世界を突き破った。

「ぎゃあーまた赤点だし！お前は？」

後ろの席から飛んできた、別の男子の声がそれに応える。

「俺はなんと、ぎりぎり回避！」

無意味な笑いと大げさな嘆きが、教室をわざとらしく彩る。そんな騒ぎの中、彼らの足音がこちらへと近づいてきた。そして、目の前で不意に声が上がった。

「えっ、篠原さん、九十五点？」

その瞬間、自分の答案用紙がふっと風にさらわれるように消えた。何が起きたのか把握する前に、彼らの歓声が飛び交う。

「わー、マジかよ。こんな点数、初めて見たんだけど！」

「おいおい、写真撮っとうござい！レアだろ！」

「……あ、あの、返してください」

声が震えた。顔を上げることができない。自分の答案用紙が、まるで見世物のように掲げられているのが、視界の隅で揺らいで見えた。

「ってかさ、篠原さんって学校休みがちじゃん？　それでこんな点数って、なんかズルくない？」

もうひとりが言った。

「うわ、もしかして不正とかしてたりして。いやいや、まさかね？」

笑い声が、ナイフのように耳に刺さった。全身がこわばる。視線が一点に集まり、皮膚の上を何百本もの針が這うような感覚。逃げ出したい、でも身体が言うことをきかない。

「ちがっ……」

唇から、か細い声が漏れた。それでも彼らには届かない。私の代わりに、教師の声が響いた。

「やめなさい！篠原さんが困っているでしょう！」

教室が一瞬静まる。私の両耳の奥だけが、まだざわめいていた。答案用紙が、乱暴に机の上に落ちた。名前の上に、鉛筆でうつすらとつけられた指紋が残っていた。私はそれを、そっと裏返した。

次の日の朝、高校へと向かうバス停の手前で、私は足を止めた。――柊木蒼真。昨日、図書室で話した彼が、イヤホンを片耳だけにつけ、バスが来るのをじっと待っていた。光の乏しい曇天の下で、彼の白い肌がいつそう浮かび上がって見えた。声をかけようかどうか迷っているうちに、彼が先に気づいた。

「おはよう。篠原さん」

「おはようございます」

そう返したつもりだったのに、喉から出た声は、思っていたよりもか細かった。数秒の沈黙。二人を隔てる空間の時計だけが、そこで止まってしまったかのような静けさ。けれど、彼は自然に言った。

「昨日、止められなくてごめん。テスト返しるとき」

深々と頭を下げられた瞬間、私は思考が追いつかなかった。

「……そんな、あなたが謝る必要なんてないです。先生が助けてくれましたし」

「でも、本当は僕が注意すべきだったんだよ。ああいうやつら、嫌いなんだ。人のこと平気で茶化して、無神経に笑うやつ」

口調は穏やかだったけれど、その芯には確かな怒りがあった。自分のために誰かが怒ってくれるという体験が、私の中ではあまりに希少だったから、それだけで心が揺れてしまう。バスが到着し、会話は中断された。隣に並んで座ることはできなかったが、彼が少しだけ振り返りながら、微笑んでくれたことが嬉しかった。

午前の授業が終わり、昼休み。いつものようにトイレへ行こうとすると、柊木くんが笑みを向けて近づいてきた。

「今日、昼ごはん、一緒に食べない？」

少し考えてから、私は頷いた。二人で中庭の小さなベンチに座り、弁当を食べながら他愛もない話をした。星新一の話、好きな教科の話、将来になりたい職業のこと。時が歩みを止めてくれたらと願った昼休みなど、今までにあっただろうか。そんな穏やかな空気を握り潰したのは、教室からこちらを覗き込んだ数人の男子だった。

「おーい、柊木！カップルかよ！付き合ってるの？」

あっという間に、私は言葉を失った。体の温度が、急激に上がっていくのを感じる。柊木くんは息を吐いて、ぼそりと呟いた。

「ほんとにあいつら、頭おかしいよね。精神科でも行ってきたらいいのに」

その瞬間、呼吸が止まった。精神科。行ってこい。ああ、そうか。私が、通っている場所だ。声にならない何かが、喉で暴れた。足元が揺れ、目の前の風景が霞む。唇だけが、何かを言うおうと震えていたが、結局、何も言葉にできなかった。彼は、悪気なんてなかった。それは、からかってきた男子たちに、何気なく吐き捨てた言葉だった。でも、その言葉は、誰よりも私自身を真つ二つに裂いた。私はただうつむいていた。食べかけの卵焼きの味が、ひどく味気なかった。

家に着くと、玄関の灯りがやけに白く感じられた。母の「おかえり」の声も、壁を一枚隔てたような距離感だった。部屋に入って、カバンを投げ出し、制服のままベッドに倒れ込む。布団の中は薄暗くて、暖かくて、息がしにくかった。――精神科に行けばいいのに。何度も、頭の中でその言葉がリフレインする。わかっている。その言葉に、特に深い意味はないことを。ただ、彼にとって「精神科」は冗談の文脈で出すだけの、遠い世界の語彙だったのだ。でも、私にとってそれは、現実そのものだった。逃げ場のない、居場所のない、処方箋の裏

に書かれた文字通りの苦しみ。

それから、何日か、学校に行けなかった。身体が動かなかった。頭痛は、少しも和らがなかった。朝が来るたびに、窓の向こうがひどく遠く見えて、気づけば夜になっていた。母は、相変わらず「寝すぎじゃない？」とか「そろそろ行ったほうが気が楽になるよ」と、どこかずれた言葉を置いていった。

ある土曜日の朝。朝食を終え、リビングから出ていこうとしたそのとき父がコーヒーを口に運びながら、私を呼び止めた。

「なあ、風。……今日、どっか行かないか」

私は顔を上げる。父がそう言うのは、ほとんど初めてだった。

「どっか、って？」

父はカップを持ったまま、少し困ったように笑った。

「競馬場」

唐突すぎて、私は返事に詰まった。競馬場なんて行ったことがないし、興味があるとも言えない。でも、父の声は優しくかった。何かを無理やり変えようとしているのではなくて、ただ、風を当ててやりたいだけ、というような調子だった。

「……いいけど」

小さな声でそう答えると、父は安心したように、ふっと息をついた。母は、「え、競馬？」とやや呆れたように眉を上げたが、「たまには気分転換も必要よね」と言って、それ以上は何も言わなかった。車の窓から、季節の変わりかけた風景が流れていった。父はときおり口笛を吹きながら運転し、私は助手席でぼんやりと空を見上げていた。空は澄んでいて、遠くの雲がまるで綿毛のように浮かんでいた。

着いた競馬場は、想像していたよりずっと広かった。風に乗って、土の匂いと草の匂いが交互に押し寄せてくる。空は高く、遠くの方で馬のいななきが響いていた。人工物とは思えない自然の一部のように、柵が延々と続き、その向こうに馬が立っていた。その馬は、黒い毛並みに午後の光がかすかに射して、まるで墨で描かれた絵のようだった。額には小さな白い斑があり、それが一瞬、涙の跡のように見えた。

「……きれい」

思わず声に出してしまったその言葉に、隣で父が笑った。

「だろ。実物見ると、やっぱり違うよな」

違う——そう思った。画面越しや印刷された写真で見てきたものとは、まるで別物だった。そこに立っているのは、「ただの馬」ではない。目の前のその生きものは、走るために、た

だそれだけのために生まれてきたようだった。どこにも無駄がなく、飾りもない。人間のうに、言葉で嘘をついたり、意図せず誰かを傷つけたりもしない。ふと、どこかで見た「サブラレッド」という言葉が、胸の内側にぽつりと落ちてきた。この馬は、誰かに傷つけられることもなく、誰かを傷つけることもないのだろうか。そんなことを考えたそのとき、不意にその馬と目が合った気がした。黒曜石のような瞳。曇りも、敵意もなかった。柵のこちら側から、私はそっとまばたきをした。ただ、見つめ返されただけだった。そこには偏見も、詮索もなかった。ただ、「存在」が「存在」を見ている、そんな不思議な静けさだけがあった。体のどこか深い場所で、小さな灯がそっと芽吹いた。それは痛みでもなく、涙でもなかった。凍りついていたものの奥に、微かにゆれる火。焚き火のはじまりのような、やわらかな息吹だった。

そのあとも、父と二人で何頭かの馬を見て歩いた。馬はみなそれぞれに違う顔をしていて、どれもレースが始まると、抑え込まれていた力を解き放つように、大地を蹴った。父が、新聞を広げながら笑う。

「どの馬が勝ちそう？」

私は苦笑いして、首をすくめた。

「私、全然わかんないよ」

「そうか？でもほら、この子なんか、速そうだぞ。脚の運びが違う」

そんなやりとりも、気づけばずいぶん久しぶりだった。笑った父の顔を、真正面から見るのも。そして初めて知った。競馬場が、こんなにも穏やかで、優しい場所であることを。

帰り道。信号待ちの車内で、父がぼつりとつぶやく。

「また来ような」

その言葉は、まるで質問でも提案でもなく、約束のようだった。

「……うん、行きたい」

気がつけば、私はそう答えていた。自分の口から出たその声に、どこかで少し驚いた。それは、自分の声が自分のものとして戻ってきたような、そんな響きだった。

精神科への通院日。学校帰りの私は、いつもより少しだけ早く歩いていた。制服の袖に残る昼の暑さと、日が傾きかけた空気の柔らかさが混ざって、風がすこしだけ、優しく思えた。鞆の端に、小さなぬいぐるみが揺れている。競馬場で父が買ってくれた、黒鹿毛の小さな馬。白い星が額にちょこんとのっついていて、どこか誇らしげに見える。ずっと机の上に置いていたけれど、今朝、なんとなく鞆につけてみた。理由は自分でもよくわからない。けれど、無意識にそうしたかったのだと思う。「ここにいて」と、自分に伝えるように。病院に入ると、

いつもの受付のチャイムが鳴った。待合室には他に誰もいなくて、空気がうすく静かだった。しばらくして呼ばれ、私は白石さんの診察室に入る。

「こんにちは、篠原さん」

相変わらず落ち着いた声で、白石さんは微笑む。その視線が、ふと私の鞆に触れた。

「あ、それ……競走馬、ですよ？」

私は一瞬、目を見開いた。「見られた」という羞恥心と、「気づいてくれた」という驚きが、同時に胸に押し寄せる。

「えっと、はい、競馬場で、父と一緒に行ったときに……」

言葉が途中で詰まる。けれど白石さんは、頷いてくれた。

「いいですね。私も昔、乗馬に通っていたことがあるんですよ。馬はね、不思議と人の心の動きに敏感なんです。とても優しく、正直で」

その言葉を聞いた瞬間、心の鎖がほどけた音がした。

「その子、いい顔してますね。篠原さんに、よく似合ってますよ」

鞆のぬいぐるみを見つめながら、白石さんが穏やかに言った。私は、視線を下げて、それを見た。触れるたびに、ぬいぐるみの小さな脚が、まるで歩いているように見える。馬は、後ろを振り返らない。ただ、まっすぐに前へ進むだけ。私はこの馬のように、なれるだろうか。

——いや、きっと、少しずつでも。私は小さく息を吸い込み、こくりと頷いた。